

『十里霧中』 番外編

——イギリスの畑の横に暮らして——

豊田 一秀

今回は子どもたちの学校の事から少し離れて、イギリスの田舎を紹介すべく、我が借り家の周りについて話を進めてみたい。

今、我々が住んでいるサリーという所はロンドンの南西部にある地域で、ロンドンに通う人たちも住む、比較的豊かな緑の多い田園地帯である。私たちが見つけた借り家は狭いながら庭もある一軒家で、何よりも気に入ったことは、家の前が見渡すかぎりの麦畑だっ

たことである。八月の始め、黄金色に輝く畑は乾いた風にやさしく波打ち、朝に夕に私を楽しませてくれた。

ある日、コンバインがやって来ると、一日にして麦畑はスポーツ刈りの畑となった。すっきりした畑に、落ち穂を食べに来るのだろうか、多くの鳥たちがやって来て、また私たちを喜ばせてくれた。十月になると、今度はトラクターがやって来て、何やら種をまい

て行った。一体、次は何の畑になるのかと毎日家族で興味津々見ていると、すぐに畑一面に可愛い新芽が生えてきた。葉の形から察するに、どうもカブか大根のようだ。芽は日に日に大きくなり、かわいい根も脹らみ始めた。一月になると、それは立派な大きさになり、形から察してカブと確信された。しかも、土から上の日に当たっている部分は赤紫色をしていてなんともおいしそうだ。妻と私は青首大根ならぬ赤首カブと勝手に名付けて、まるで自分たちが種を蒔いたような気持ちになって成長を楽しみにしていた。

ある午後、私たちはついに誘惑に負けてしまったのだ。いつものように二人して散歩をしている時にふと畑を見ると、お手本のようにきれいな形をした一株と目が合ってしまった。しかも、それは少々土から出てしまっていて、そのままでは枯れてしまいそうである。私たちはうなぎ合うと、家に連れて帰ることにした。日本的なものに飢えていた私たちは、薄切りにして塩もみで食べることにした。ワクワクしながら食

卓を囲んだ我々であったが、それは香りこそ良かったものの、味の方は水気がなく「す」が入ったようである。私たちは少々落胆したものの、懐かしさもあって全部食べてしまった。少々後ろめたい後味が残った。

味を知ってしまった後、少し覚めた目で畑を見るようになった私たちであったが、二月にもなると、今度は、この見渡す限りのカブを一体どのようにして収穫するかという点に私たちの興味が注がれた。それに、町の八百屋の店頭にはまだその種のカブが売られている様子がない。

そんなことを気にしながら、ある日、大学から帰って来ると大変な事が起こっていた。何と畑一杯に羊の群が入っているのである。そして、モリモリとカブを食べている。

一大事！ 農家の人には知らせなくてはと思った後、ハッと私は悟った。そもそもこの農地は酪農家の土地なのだ、もしか、あの赤首カブは人間用ではなかったのかも……。



▲部屋から見た畑「大切なカブが……」

がっくりきた気持ちで畑に近付いてみると、羊たちは「これですよ!」といった顔で、平然とうまそうにカブをはんでいる。そして、辺りには羊の糞が新しく蒔かれた種のように点々としている……やれやれ。

考えてみれば、これがきつと栄養となって次の作物が育ち、そして一年、一年が廻っていくのだから、今までもずっとそうであったように。初めて畑の廻りというものを間近で見た私は、少しばかり悟りが開けたような気持ちでグレーの空を見あげた。

それにしても、見渡せば上半分しか食べていないカブが、辺り一面に食い散らかしてある。なんていうこった、「オイ! 羊たち! 俺たちはナ、全部きれいに食べたんだゾ!」。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)